

## 信頼をつなぐ 福島の桃生産地視察ツアー

### 福島の生産者の除染への取り組み

東海コープでは、今年の夏、福島産の桃を取扱うことに決めました。去年は、職員向けにのみ(福島応援隊)販売しましたが、今年は、その取り組みを発展させ、組合員へ向けて大々的に展開していきます。

2012年6月19日、東海コープは、福島県伊達市にあるJA伊達みらいを訪れました。3度目となる今回の訪問には、組合員3人が同行しました。コープあいち、コープぎふ、コープみえ、それぞれの組合員3人は、JA伊達みらい職員や生産者にインタビューをし、それらをレポートにまとめます。このレポートは、今後のプロモーションに生かされる予定です。

JA伊達みらいを訪れた東海コープ一行は、JA伊達みらい管内の生産者たちの放射線への対策をまとめた映像を鑑賞しました。

生産者の声を取り入れながら、映像は展開されていきました。福島県の検査センターの調査によって、果樹の中で放射線を含むのは、葉っぱや樹皮が主な部分と分かりました。また、放射線は土の表面に留まることが多いため、根からの吸収は少ないといえます。葉は冬に落ちるため、樹皮の放射線量を下げれば、果実への放射線量を減らすことができると考えました。そこで、生産者たちは、枝につららができる極寒の時期、果樹を一本一本高压洗浄したり、粗皮削りをしたりという作業を行なってきました。その結果、高压洗浄だけをした果樹の放射線量は、46~71%の低減、粗皮削りを同時に行なったものは62~79%の放射線量の低減につながりました。また、土壌へも、放射性物質を除去するゼオライトをまくなど、さまざまな取り組みをしてきました。

映像を観終えたコープぎふの組合員である山村まさこ(やまむらまさこ)さんは、「この地域には、祖先から受け継いだ90年間の桃の生産技術の継承があるということです。それが放射線の問題で止まってしまうことを、なんとしても阻止しようという、生産者の皆さんの思いと努力に心打たれました」と語りました。

さらに、東海コープ職員とJA伊達みらいの職員との意見交換や、組合員によるインタビューが行なわれました。

JA伊達みらいの藤田一則(ふじた・かずのり)さんは、「放射線はもともと自然界にもあるもの、どんなところで生産しても、ゼロにすることはできません。また、国が定める年間被ばく量の上限1ミリシーベルトという数値は、仮に100ベクレルのリンゴで換算すれば、



除染作業の様子や、生産者の声が収められた映像を鑑賞しました。このDVDは、東海コープの勉強会でも使われる予定です。

年間 8,000 個食べなければその値にはなりません。ごく微量だからといって、安全と断言はできませんが、正しい知識がないことが、過剰な風評被害につながっていく原因ではないかと思います」と話してくれました。

「どんな活動をすれば消費者に理解してもらえるのか」と、JA 伊達みらいの須田和弥(すだ・かずや)さんから、逆に質問が投げかけられる場面もありました。それに対して、コープあいちの組合員である加藤恵子(かとう・けいこ)さんは、「自分自身もそうでしたが、ここに来るまで、放射線の知識もなかったし、除染のやり方も直接水で桃の実を洗うのだと誤解していました。実際に食品を購入するお母さんたちに向けて、放射線を理解できる食育用のツールや映像を制作してみたらどうでしょうか」とアイデアが出されました。

### 桃を育てる生産者に組合員がインタビュー

その後、生産者の JA 伊達みらいの部会長である斎藤栄慶(さいとう・しげよし)さんの桃畑を訪れ、交流しました。また、東海コープでも独自に放射線量を検査するために桃の実を持ち帰りました。さらに、場所をコープふくしまのコープマート保原に移し、昼食を共にしながら交流を図りました。

昨年、この地域で作られた桃に含まれる放射線量は、8~9割が 20 ベクレル以下、多いものでも 50 ベクレル以下でした。現在、国が定めている 100 ベクレルという基準値を下回っていましたが、市場での取引価格は従来の半値でした。今年も同じ値段がつけば、多くの生産者が、生活ができなため、農業を断念する恐れがあります。JA 伊達みらい管内の生産者たちにとって、今年がまさに正念場です。



青々と葉が茂り、小さな実がなる桃の木。

斎藤さんは、「私の桃畑には 1,000 本近い桃の木がありますが、冬の期間、一本一本懸命に除染作業を続けてきました。農家の心中は、やれることはやったという復活への期待と、今年も駄目であれば断念せざるをえないという不安な気持ちの両方があります」と語ります。

3年で収穫できるようになるが、収量がまとまるのは 6、7年かかるという。

今後、東海コープは、7月20日頃に再び福島を訪れ、桃の出荷の最終確認をし、8月より共同購入で供給していく予定です。今年の桃は、ほとんどが 20 ベクレル以下、もしくは限りなく 0 に近い数字が予測されます。

コープみえの組合員である吉富あゆみさん(よしとみ・あゆみ)は、「福島に行くよ、と友人に話したら、大丈夫?と心配されてしまいました。今は自信をもって、大丈夫、と答えられます。生産者の努力を多くの人に伝え、安心を広げていければと思います」と力強く言いました。

生産者の懸命な取り組みを見学し、直接言葉を交わす中で、組合員と生産者の間には、ゆるぎない信頼が築かれていました。この信頼を、より多くの人につないでいくことで、風評被害を跳ね返す、大きな力につながっていくことが期待されます。